

## 「大志」を持って不確実な時代を生き抜く

「少年よ大志を抱け」は1877年(明治10年)クラーク博士が札幌農学校を去る際に語った言葉です。明治維新で激動する時代に日本の新たな国造りを目指す若者に向けた言葉です。私は「大志」とはどのような状況でも変わらない基本的価値観と目標とを合わせもった「生きがい」ではないかと考えています。

「大志」のイメージをつかんでもらうための例え話です。ピラミッドを作る石を運んでいた人に「君は今、何をしているのだ」と尋ねたところ一人は「見ればわかるだろ石を運んでいる」と答え、もう一人は「王様の墓を作っている」と自慢げに言い、別の一人は「歴史に残る事業をしている」と胸を張りました。同じように石を運んでいても意識が全く違うのです。同様に河川の護岸工事を担当する職員に何をしているのか聞くと一人は「コンクリートで護岸を作っている」と言い、一人は「氾濫して水害が起こらないよう工夫している」と答えました。三人目は「地域防災システムの一部を作っている」と説明しました。三番目の人は下水道のポンプ場に異動しても森林管理を担当するようになっても同じ答えができます。大きな目標(大志)があれば、どの仕事に取り組んでも生きがいに結びつけられ達成感を感じることができます。

クラーク博士の名言から150年近くを経た現代、西欧にも追いつき、モノからコトへ時代が大きく変わりつつあります。また、少子高齢化や気候変動など過去にはなかった課題が山積し、共働きなど働く環境も変化しています。その上、経験したこともなかった自然災害やパンデミックに見舞われています。

このように明治維新にも劣らない不確実な未来を生きる今の若者に「少年よ大志を抱け」と改めてエールを送りたいと思います。「大志」はつくりあげるのでも与えられるもでもなく自分で見つけるものです。私は「北九州市を魅力的な街にしたい」という生きがいから何度も達成感をもらいました。

## コロナ禍の散歩中に気づく

おばせキャンパス近くの小高い丘にある大熊公園を散歩するのが昼休みの日課です。東は瀬戸内海、西は高城山、北に小倉南区の山、南には行橋の街並みを臨めます。樹木の香りや野鳥の姿に季節の移り変わりを感じる公園です。渡り鳥が少ない夏場は雀の独壇場ですがセミの鳴き声の変化などを感じながら園路を3周歩きます。このウォーキングが思いがけない気づきと創造を生むのです。

土日は自宅近くの関門海峡を一望出来る大里海岸緑地です。日々表情が変化する海の色や吹き抜ける風に季節を感じます。波間のきらめきや関門海峡を行き交う大小さまざまな船を見ていると日常を忘れてリフレッシュできます。

ところが、長引くコロナ禍の昨今、歩いているとこれからどんな社会が来るのだろうか？という思いに駆られるのです。コロナ禍が落ち着きさえすれば元の社会に戻るからと日本中が我慢と思考停止に陥っているのではと心配になって来たのです。コロナ禍でもオリンピックやパラリンピックは開催され、アフガニスタン情勢は日々変化しています。また自動車のEV化など化石燃料を使わない社会への転換や量子コンピュータの開発も着々と進んでいます。海側に続く自動車工場が見える園路を歩いていると、停滞している日本経済の下で半導体不足が叫ばれる疑問が、デジタル化の加速の「証」と気づきました。

また、本社移転やワーケーションなど分散型の仕事が叫ばれる中で、街中の人手が減らないことが話題になっています。散歩中、ポストコロナの賑わい拠点はどうなるのだろうか？賑わいと自然の豊かさとは反比例するけれど、デジタルなどの先端技術で融合できるかなと考えていました。戻って検索してみると点在する商業リゾート三重「VISON」と人口減6町で挑む「スーパーシティ構想」の記事を見つけました。決定的な考え方の転換をしないと見えない「もやもやした疑問」は意外にも歩いている途中にくっきりしてくるのです。